平成１７年１月２６日

２００４年度第２回企画展

「あったかく暮らす」開催！

～　昔の暖房器具で身も心もあたたまる　～

本日から3月13日（日）まで、豊島区立郷土資料館（西池袋2丁目）において、2004年度第2回企画展「あったかく暮らす」が開催される。懐炉（かいろ）・湯たんぽ・行火（あんか）・火鉢・炬燵（こたつ）など、冬の寒さをしのぎ暖かくすごすために、1920 年代から 1970 年代にかけて、実際に使われていた道具にスポットをあて、様々な魅力を紹介するユニークな展示会。

会　　場：　豊島区立郷土資料館　　西池袋２－３７－４　勤労福祉会館７階
開館時間：　午前 9 時～午後 4 時 30 分入館　　毎週月曜・第 3 日曜・2 月 11 日休館　　入場無料
展示説明会：　1 月 29 日（土）・3 月 12 日（土）午後 2 時～3 時

現在の生活においての熱源の大部分は、電気やガスに頼ったものであるが、これらが主流となる以前は、木炭や炭団（たどん）・煉炭（れんたん）・豆炭（まめたん）等が主に使われていた。今回展示されるのは、こうした燃料を使った暖房具等で、そのほとんどが区民の方から寄贈を受けたもの。展示される道具や資料は126点にのぼり、その道具についての提供者のエピソードなどを紹介し、関連ずる写真パネルは25枚ある。

◆寒い夜に　～湯たんぽ～

沸かした湯の暖かさを利用した暖房具である「湯たんぽ」は、就寝中の寒さを防ぎ、病人のためにも使われていた。明治時代ごろに出来たと言われ、デザインや仕組みを変えつつ今も使われ続ける「湯たんぽ」を、実際の使い方を解説しながら紹介。陶器や金属など材質の異なる様々な湯たんぽを展示している。なかでも魚のデザインが施されたものが、「たいやき」を連想させてユニーク。

◆小さなぬくもり　～懐炉～

携帯用に使われていた暖房器具である「懐炉」を展示。懐炉灰という燃料を使った初期のものから、ベンジンと白金の触媒作用によって発熱するもの、ガラス繊維を使用したものなど、現在の「携帯カイロ」へ進化していく過程を、実物を交えて紹介。

◆工夫を重ねて

・土で作った暖房具　～ねこあんか～
ねこごたつ、ねこなどとも呼ばれる土器製の暖房具を展示。それらの製造元と思われる、愛知県三河地方まで、そのネーミングのルーツをたどる。いったいどのようなエピソードが隠されているのでしょう？

・足先をあたたかく　～足温器・行火（あんか）～
冬の寒さをしのぐための足温器や行火を紹介。いかに足を暖かくして過ごすかという点に工夫が凝らされている点に注目。

◆みんな集まって

・さまざまな火鉢
磁器や桐などの木、合金などで作られた、さまざまな火鉢を展示。かつては嫁入り道具で、一対のものとして用意されていた火鉢がどのように使われていたのか、当時の暮らしぶりを交えて紹介。

・布団をかけて　～掘炬燵・置炬燵～
いろりから発達したと言われる掘り炬燵、火鉢を起源とすると言われる置炬燵を紹介。特に置炬燵は布団も用意して、実際に足が入れられるようになっているところがポイント。

（次ページへ）

（前ページから続き）

◆火熾しと燃料

・火熾し道具

炭や煉炭・豆炭などに火をスムーズにつけるための道具を紹介。なかには未だ区内の家庭で使われている長火鉢とともに、火熾しの過程を、写真を交えて解説。

◆まちの燃料店

1970年代頃まで家庭燃料として欠かせなかった木炭を扱っていた薪炭問屋の当時の様子を、写真（大正12年から戦前、昭和20年代まで）を交えて紹介。これまで寄贈された、木炭や炭団（たどん）・煉炭（れんたん）・豆炭（まめたん）の展示や、炭団の製造過程を紹介している。

展示されているものは、かつて日常的に使われていた道具としての「暖房具」でした。そして今、湯たんぽや火鉢は、環境への配慮や利便性という点で見直されています。風はまだ冷たく、コートやマフラーが手放せない季節が続きますが、かつての暖房具の「あたたかさ」をもう一度見直してみては？

詳細　　郷土資料館